

下に伸びていることに気付く。このことはその本質を究明する一つの手がかりとなる。また館野、八丈島、鳥島など、東方に位する地点の上空で等値線のくびれているのは、低圧槽の谷が日本海岸沿いに南へ延びていることを示している。

以上は次の報文の1部を要約したものであるが、調査の進捗によって新しい発展を期したい。

参考文献

中田良雄, 1963: 500mb 面高度年変化の解析的研究, 研究時報, 15, 24-46.

中田良雄——: 日本付近上空大気の解析的研究(1), 1965, 6月日本気象学会例会に発表, 未定稿.

付記——この研究の結果から推察される予備的見解を列記して今後の研究の参考に供する。

1) ジェット流の存在は帯状主循環系の構造から必然的に理解され、その地域的盛衰は地勢循環系を考慮することによつて観測されよう。

2) 成層圏突然昇温の現象は熱帯対流圏に醸成される

暖気団が低圧槽に向つて北連上昇する地勢循環系の1過程として説明されよう(南半球では地勢循環系の形態を異にし、これに対応して突然昇温の様相も単調となる)。

3) 波数解析において現われる波数1は帯状主循環系に対応し、波数2の優越は地勢循環系の二つの低圧槽の発達を意味し、波数3は帯状主循環系と地勢循環系の競合と共にタイムリ低圧渦の抬頭を加味することによつて理解されよう。

4) 日本の異常気象の特徴を抽出する際に気圧特異型式の中心がしばしばシベリア東部オホーツク海周辺に見られるのは低圧槽に伴う寒気の消長に関連するものと考えられ、古くから大気活動の中心として注目されていた地上におけるアリューシャン低気圧は新たに見直される必要があろう。

5) 冬季日本海側の豪雪をもたらす寒気の動向が500mb 天気図上でよく捕捉されるのは対流圏寒気の中心がそれよりやや高い所にあるためと見られよう。

6) 対流圏内のエネルギー収支は日々の対流及び擾乱によつてその中心部に集積され、その消長は直接圏界面高度に現われるものと考えられる。

“ヨーロッパきこう”

吉野正敏著

古今書院発行, ¥ 380円 199頁.

「きりう」を気候という意味にとった人が多かったらうと思う。それほど、この本の著者は少壮気候学者として令名をはせている。

また、平仮名で書名を書いたのは、変にひねくれたのかと誤解され勝ちであるが、そのような考えを持った人は、「あとがき」を読んで見るとよい。いや、それよりも本文中のどの章でも読んでみると良い。海外旅行者が単純に素晴らしい景観、あるいは珍しいものとして観賞し、紹介するだけに終わっている多くの地方色豊かな現象が、気候学、地理学の裏付けを与えられながら、物語られる。

内容は3部に分かれ、第1部生きている風土・ヨーロッパ、第2部ドイツきこう、第3部風やのりれき書となっている。

ヨーロッパといっても、著者の留学した西ドイツが中心であるが、観測その他で旅行した途中や先の国々の風物、出来事も紹介される。いちいち、その内容を紹介する余裕はないので、評者の特に興味深く読んだところを

挙げてみると、風景物語、ヨーロッパの新聞天気図、ポンの果物・野菜市場、高校地理と気候学、風の吹きまわしである。いずれも、地理学者、気候学者としての透徹された観察眼と、ささいな日帯の出来事の中にも、疑問を明らかにしようとする学問的意欲がにじみ出ており、いろいろと教えられることが多かった。気象界でも海外留学生は数多くあるが、例えば、新聞天気図にしても、著者のような注意の下に収集し、紹介したことを聞かない。海外旅行者の紀行文として優れているばかりでなく、われわれの身の廻りに日常現われているささいな事柄の中にもいろいろと問題がころがっており、それが一寸した気の配り方で興味深い研究に発展することを教えている。

ケッペンの気候分類についての日本とドイツとの違いは、日本の地学教育における欠陥を端的に表わしたものとはいえないだろうか。

読んで楽しく、しかも深い示唆に富んだ小本として、是非多くの人に読んでいただきたい本である。

(奥田 稜)